

制御焦点の違いが嘘をついたときの 透明性の錯覚に及ぼす効果

奥川 裕*・工藤恵理子**

他者と相互作用する中で、人は自分の考えていることや感じていることが実際以上に相手に伝わると思い込むことがある。このような現象は透明性の錯覚 (illusion of transparency) と呼ばれ、さまざまな内的状態についてこの現象が生じることが示されてきている (遠藤, 2007; Gilovich, Savitsky, & Medvec, 1998; 鎌田, 2007; Kruger, Gordon, & Kuban, 2006; 工藤, 2007; Savitsky & Gilovich, 2003; 武田, 2006; 武田・沼崎, 2006, 2007; Vorauer & Claude, 1998; Vorauer & Ross, 1999; Vorauer & Sakamoto, 2006)。

これまでの研究では、パーソナリティ (Vorauer & Ross, 1999) や好み (武田・沼崎, 2006) のような比較的安定した内的属性だけでなく、相互作用中に持つ意図 (Kruger et al., 2006; 武田・沼崎, 2007; Vorauer & Claude, 1998) や相手への関心 (Vorauer & Sakamoto, 2006)、スピーチの際の不安 (Savitsky & Gilovich, 2003) や緊張 (遠藤, 2007) といった内的状態についても透明性の錯覚が生じることが示されてきている。さらに、内的状態を伝えたい場合だけでなく、嘘をついているときにように内的状態を隠したい場合にも (Gilovich et al., 1998; 鎌田, 2007; 武田, 2006) 透明性の錯覚が生じることが分かっている。

透明性の錯覚を生じさせるメカニズムとして考えられているのは、係留と調整に基づく、自己中心的な推論である (e.g., Gilovich et al., 1998)。人は、

* 人間科学研究科生涯人間科学専攻博士後期課程

** 現代教養学部人間科学科心理学専攻

他者に自分がどう見えるかを推論するときに、まず、自分自身が自分をどう捉えているかを推論の出発点とし、他者は自分と同じようには自分の内的状態は分からないことを考慮して、推論を調整する。このとき、推論の出発点が係留点として働き、調整は不十分になりやすい。そのため、他者が自分の内面がわかる程度を過大視してしまうと考えられている。この説明モデルに基づくと、係留点となる自分自身の状態の把握が極端であると、その分、他者に自分の内面がわかると過大視する程度が大きくなると考えられる。実際、Gilovich et al. (1998) では、実験の中で実害のない些細な嘘を実験参加者につかせ、その嘘が他者にばれる程度を推測する課題を用いてこのことを検討している。その結果、自分の内面に注意を向ける傾向である、私的自己意識が高いほど自分の嘘が他者にばれる程度を大きく見積もること、自分の嘘があからさまである（嘘であると分かる）と捉えていることが示されている。

このように、嘘をつく場面について考えると、嘘をついたときに、自己意識が高まっていると、自分の言動や内的状態に注意が向けられることになる。そのため自己意識の高まっていない場合と比較して、自分の視線が泳いだり声が上ずったりといった、嘘をついていることのサインと見なされるような不自然な言動に、たとえそれらが些細なものであっても気づきやすくなると考えられる。その結果、相手にもそういった些細な不自然な言動が気づかれ、嘘がばれると感じる傾向が強まると考えられる。

では、日常生活において私たちが嘘をつくとき、どのような要因が私たち自身の言動に注目を引き起こし、その結果、嘘がばれると過度に推測させるのだろうか。本研究では、嘘をつき通したいと思って嘘をついているか、あるいは、嘘がばれたら困るのでその事態を避けたいと思って嘘をついているか、といった、目標としての嘘の捉え方の違いの影響を検討する。例えば、相手を何とか喜ばせようとして嘘をつき通したいと考えているときと、相手を悲しませまいとして嘘がばれないようにしようと考えているときを比べると、後者の方が嘘がばれると感じる可能性があるのではないだろうか。なぜ

なら、嘘がばれないよう、つまり、失敗を回避するように動機づけられている場合には、成功に動機づけられている場合よりも、嘘がばれるのを防ぐために自分の言動により注意を払うため、結果的に嘘がばれるような手がかりに注目することになり、嘘がばれると感じる可能性が考えられるのではないだろうか。

上述のような成功の追求と失敗の回避は、目標追求における制御焦点 (Higgins, 1998; Idson & Higgins, 2000) の違いとして説明されている。制御焦点の研究では、かなえたい理想や希望として目標を捉える促進焦点と、果たさなければならない義務や責任として目標を捉える防衛焦点を区別する。促進焦点の状態では、理想や希望の達成といった肯定的結果の有無に焦点が当てられ、接近を目指す状態にあり、防衛焦点の状態では、義務や責任を果たせないといった、否定的結果の有無に焦点が当てられ回避を目指す状態にあるとされる。これを嘘をつく場面にあてはめると、嘘がばれたら困ると考えているときは、失敗を回避しようとする、防衛焦点の状態にあると考えられる。そのような状態では、失敗を回避するために、失敗（つまり嘘がばれるようなサインの表出）の有無に注目しやすくなると考えられる。その結果、促進焦点の状態と比較して防衛焦点の状態では、自分の嘘が相手に推測可能であると考えやすくなる可能性が考えられる。本研究では、嘘をつく場面において制御焦点を操作し、防衛焦点にある参加者の方が促進焦点にある参加者よりも透明性の錯覚が大きくなる、つまり、嘘がばれると推測する程度が強まるかどうか実験によって検討した。

方 法

参加者: 都内の女子大学生 40 名 (19~22 歳, 平均 19.6 歳, $SD=.75$)。実験終了後に記入した承諾書にデータの使用を許可しないと回答した 1 名を含むペアは分析から除外した。また、関係の親密度は透明性の錯覚に影響を及ぼすことが知られているため、知り合いの程度をたずねた尺度 (1. ここで初めて会った~11. 大親友の 11 件法で数字が大きいほど親しいことを示す)

で回答が5以上だった2ペア4名も分析から除外した。最終的に分析に用いたのは34名のデータだった(19~21歳, 平均年齢19.7歳, $SD=.77$: 行為者17名のみだと19~21歳, 平均19.7歳, $SD=.77$)。

手続き: 実験は2人ペアで実施した。実験室に到着後、嘘がばれる要因に関する実験であるとの説明を受けた。参加を承諾したペアに対してお互いが知り合いである程度を測定する質問紙に回答を求めた。その後くじ引きによって行為者役(嘘をつく役)と観察者役(嘘を当てる役)に割り当てた。2人の参加者の体験を等しくするため、行為者役と観察者役を交代してもう1ターン同様の実験を行ったが、最初に観察者役を経験した場合、嘘を見破ることが実際には困難であることを学習してしまう可能性が高いため、1ターン目の結果のみを分析に用いた。

行為者役(嘘をつく役)の課題はマークと数字が書かれた面を伏せて置かれた5枚のトランプのカードをめくり、マークと数字を読み上げるものだった。5枚のカードのうち1枚はジョーカーであり、ジョーカーをめくった際にはジョーカーであることが分からないように嘘のマークと数字を読み上げるよう教示された。マークと数字を読み上げる際には観察者役の顔を見ることが、どれがジョーカーか観察者役に気づかれないように、実験全体を通してできるだけ無表情を保つように教示した。5枚のカード(そのうち1枚はジョーカー)の読み上げを1セッションとした。

観察者役(嘘を当てる役)の課題は、行為者役(嘘をつく役)の参加者がカードをめくり、マークと数字を読み上げるのを観察し、いつ嘘をついているか、つまりどのカードがジョーカーであるかを当てることだった。

行為者役が5枚のカードのマークと数字を読み上げた後、行為者役も観察者役も各セッション終了後の質問紙に回答した。この手続きをカードの組合せを変えて5回行った。全5セッション終了後、全セッション終了後の質問紙に回答した。その後役割を交代してもう1ターン(5セッション)行い、実験参加者は全ターン後の質問紙に回答した。

最後にデブリーフィングを行い、実験参加者は、データの使用を許可する

かどうかの承諾書に記入した。

制御焦点の操作：参加者ペアはランダムに促進焦点条件または防衛焦点条件に割り当てられた。制御焦点は、トランプのカードを用いた課題がすべて終了した後に行う課題についての指示によって操作された。促進焦点条件の参加者への指示では、全ターンが終わった後に別な課題を行うが、その課題は通常 20 分かかるところ、嘘をつき通した回数に応じて最短 5 分になるかもしれないと説明された。防衛焦点条件の参加者への指示では、通常 5 分かかる課題が嘘を見抜かれる回数に応じて最長 20 分になるかもしれないと説明された。促進焦点条件は 7 ペア 14 名、防衛焦点条件は 10 ペア 20 名だった。

質問紙：それぞれの時点で以下の質問紙に回答した。

〈各セッション終了後 行為者（嘘をつく役）〉

観察者がジョーカーを当てることができたと思うか（2 件法：1. 当てることができたと思う、2. 当てることができなかったと思う）、セッションを通してどのくらいうまく無表情を保つことができたと思うか（7 件法：1. まったくうまくできなかった～7. かなりうまくできた）、嘘をついたときにどのくらいうまく無表情を保つことができたと思うか（7 件法：1. まったくうまくできなかった～7. かなりうまくできた）、嘘をついたときにどのくらい緊張したか（7 件法：1. まったく緊張しなかった～7. かなり緊張した）、観察する役だったら嘘を見抜くことができると思うか（2 件法：1. 当てることができたと思う、2. 当てることができなかったと思う）、その確信度（7 件法：1. まったく確信がない～7. かなり確信がある）。

〈各セッション終了後 観察者（嘘を当てる役）〉

どのカードがジョーカーだと思うか（カードの番号を記入）、その自信（7 件法：1. まったく自信がない～7. かなり自信がある）、行為者はどのくらいうまく無表情を保つことができたと思うか（7 件法：1. まったくうまくできなかった～7. かなりうまくできた）、行為者はどのくらい緊張しているように見えたか（7 件法：1. 全く緊張していなかった～7. かなり緊張していた）。

〈全セッション終了後 行為者〉

全体的にどのくらいうまく無表情を保つことができたと思うか（7件法：1. まったくうまくできなかった～7. かなりうまくできた）、見抜かれないように嘘をつくのは簡単だったか（7件法：1. 全然簡単でなかった～7. かなり簡単だった）、全体的に嘘をうまくつき通せたと思うか（7件法：1. まったくうまくつき通せなかった～7. かなりうまくつき通せた）、嘘を当てられないために行った工夫（自由記述式）、全ターン後に行う課題は何分かかると説明されたか（穴埋め記述式）、成功動機・失敗回避動機（各2問：成功動機：ジョーカーを隠し通すことができた嬉し・何とかしてうまくジョーカーを隠し通したい、失敗回避動機：何とかしてジョーカーが相手に分かることを避けたい・ジョーカーが相手に分かることを避けられれば嬉しい、それぞれ7件法：1. まったく感じていなかった～7. 非常に感じていた）、嘘をついているときに自分の言動に気をつけた程度（発言、表情、声色、目線、動作について、それぞれ7件法：1. まったく気をつけなかった～7. かなり気をつけた）、嘘をついているときに自分の言動が不自然でないか気になった程度（発言、表情、声色、目線、動作について、それぞれ7件法：1. まったく気にならなかった～7. かなり気になった）、促進焦点または防衛焦点に関連する感情をどの程度感じているか（12問：5件法：0. まったく感じていない～4. かなり感じている）。

〈全セッション終了後 観察者〉

全体的に行為者はどのくらいうまく無表情を保つことができたと思うか（7件法：1. まったくうまくできなかった～7. かなりうまくできた）、成功動機・失敗回避動機（各2問、それぞれ7件法：1. まったく感じていなかった～7. 非常に感じていた）、嘘を見破るのは簡単だったか（7件法：1. 全然簡単でなかった～7. かなり簡単だった）、行為者の言動に注目した程度（発言、表情、声色、目線、動作について、それぞれ7件法：1. まったく注目しなかった～7. かなり注目した）、どれがジョーカーか決めるときに行為者の言動を重視した程度（発言、表情、声色、目線、動作について、それぞれ7件法：

1. まったく重視しなかった～7. かなり重視した)、全体的に嘘をうまく見抜けたと思うか (7 件法: 1. まったくうまく見抜けなかった～7. かなりうまく見抜けた)、促進焦点または防衛焦点に関連する感情をどの程度感じているか (5 件法: 0. まったく感じていない～4. かなり感じている)。

〈全ターン終了後 両者〉

菅原 (1984) の自己意識尺度、実験に対する疑念 (自由記述式)。

結 果

操作チェック

〈教示の理解〉

全ターン後に行う課題についてどのように説明を受けたかをたずねる質問に、分析対象者の全員が正しく回答しており、焦点操作は適切に理解されていた。

〈自分への注目〉

全セッション終了後に回答した行為者が言動に気をつけた程度に関する評定について、信頼性を低下させる 1 項目 (声色に気をつけた程度) を削除した 4 項目 ($\alpha=.70$) の得点の平均をもって行為者の自分への注目の指標とした。同様に全セッション終了後に回答した、行為者が言動が気になった程度に関する評定についても信頼性を低下させる 1 項目 (声色が気になった程度) を削除した 4 項目 ($\alpha=.52$) の得点の平均を用いた。それぞれの評定が制御焦点条件によって異なるかどうかを検討したところ、言動に気をつけた程度は促進焦点条件で平均 4.68 ($SD=1.30$)、防衛焦点条件で平均 5.30 ($SD=1.27$) であり、防衛焦点条件の方が促進焦点条件よりも気をつけたと回答していたが差は有意ではなかった ($t(15)=.98, ns$)。言動が気になった程度は促進焦点条件で平均 4.32 ($SD=.69$)、防衛焦点条件で平均 5.78 ($SD=1.00$) であり、防衛焦点条件の方が促進焦点条件よりも自分の言動が気になったと回答していた ($t(15)=3.33, p<.01$)。

嘘を見抜かれるのを回避したいと動機づけられる防衛焦点条件では、嘘を

つき通したいと動機づけられる促進焦点条件よりも、自分の言動により注意を向けるという結果となっており、動機づけによって自分の言動への注目を異ならせることができたと考えられる。

動機づけ

行為者の成功動機、失敗回避動機が制御焦点の操作によって異なるかどうかを検討した。成功動機を測定する2項目の信頼性係数は $\alpha=.70$ 、失敗回避動機を測定する2項目の信頼性係数は $\alpha=.93$ だった。成功動機と失敗回避動機を測定する2項目の平均をそれぞれ成功動機得点、失敗回避動機得点とした。成功動機得点は促進焦点条件で平均 5.07 ($SD=1.48$)、防衛焦点条件で平均 5.15 ($SD=1.47$) でありその差は有意ではなかった。失敗回避動機得点は促進焦点条件で平均 4.71 ($SD=1.82$)、防衛焦点条件で平均 5.70 ($SD=1.30$) と防衛焦点条件の方が動機づけは高かったものの、統計的に有意な差ではなかった。成功動機得点と失敗回避動機得点の相関は全体で $r=.82$, $p<.001$ 、促進焦点条件で $r=.90$, $p<.01$ 、防衛焦点条件で $r=.83$, $p<.01$ と大変高かった。

行為者の透明性の錯覚

観察者が実際に嘘を当てた回数と比較して行為者に透明性の錯覚が生じているかどうか、透明性の錯覚は条件によって差があるかどうかを検討するために、行為者の推測と実際に観察者が嘘を当てた回数に対して2(役割: 行為者推測 *vs.* 観察者実際) \times 2(条件: 促進焦点条件 *vs.* 防衛焦点条件)の混合要因分散分析を行った(役割は繰り返し要因)。役割の主効果のみが有意であり($F(1, 15)=6.53$, $p<.05$)、行為者による推測(平均 2.35, $SD=1.00$)の方が、観察者が実際に嘘を当てた回数(平均 1.53, $SD=.87$)よりも高く、透明性の錯覚が生じていた。条件の主効果、役割 \times 条件の交互作用は有意ではなかった。

交互作用は有意ではなかったものの、条件ごとに行為者推測と観察者実際

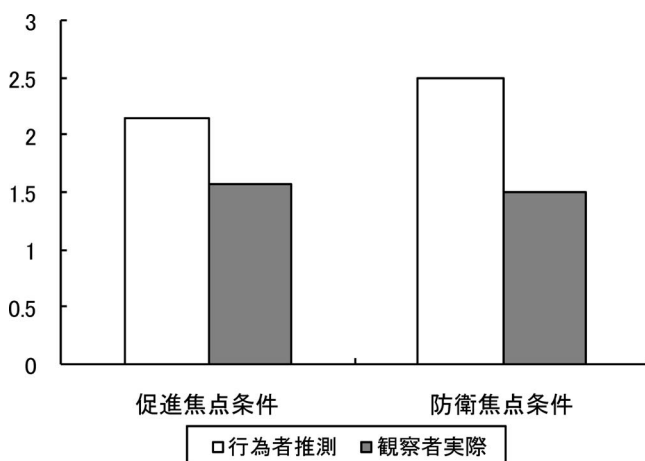


Figure 1 行為者が嘘を当てられると回答した回数（行為者推測）と観察者が実際に嘘を当てた回数（観察者実際）

に差があるかどうかを検討した。促進焦点条件（行為者推測平均 2.14, $SD = 1.07$; 観察者実際平均 1.57, $SD = .98$ ）では役割による違いは見られなかったが、防衛焦点条件（行為者推測平均 2.50, $SD = .97$; 観察者実際平均 1.50, $SD = .85$ ）では有意な差が見られ ($F(1, 15) = 6.33, p < .05$)、行為者は実際に当てられるよりも多く嘘を当てられると推測しており、透明性の錯覚が生じていた。

観察者の実際の透明性

観察者が実際に嘘を当てた回数が条件によって異なるかを検討したが、促進焦点条件の観察者が実際に当てた回数の平均は 1.57 回 ($SD = .98$)、防衛焦点条件では 1.50 回 ($SD = .85$) であり、差は有意ではなかった。

いずれの条件の観察者も嘘を当てた確率はチャンスレベルと異ならなかった（促進焦点条件 $t(6) = 1.55, ns$; 防衛焦点条件 $t(9) = 1.86, ns$ ）。

Table 1. 各測定変数の平均値と標準偏差

		範囲	全体	促進焦点条件	防衛焦点条件
各セッション後	行為者が嘘が当てられると推測した回数	0-5	2.35 (1.00)	2.14 (1.07)	2.50 (.97)
	観察者が実際に嘘を当てた回数	0-5	1.53 (.87)	1.57 (.98)	1.50 (.85)
	セッションを通して無表情をうまく保つことができた程度	1-7	4.69 (.99)	4.63 (.86)	4.74 (1.11)
	嘘をついたときに無表情をうまく保つことができた程度	1-7	4.59 (.82)	4.66 (.85)	4.54 (.84)
	嘘をついたときに緊張した程度	1-7	4.71 (1.18)	5.2 (1.01)	4.36 (1.21)
	観察者なら嘘を当てることができるか	0-1	.35 (.25)	.31 (.23)	.38 (.27)
全セッション後	全体的にうまく無表情を保てた程度	1-7	4.76 (1.25)	4.57 (1.13)	4.90 (1.37)
	成功動機	1-7	5.12 (1.43)	5.07 (1.48)	5.15 (1.47)
	失敗回避動機	1-7	5.29 (1.56)	4.71 (1.82)	5.70 (1.30)
	嘘をつくのは簡単だった	1-7	2.88 (1.22)	2.57 (1.27)	3.10 (1.20)
	嘘をついているときに言動に気がつけた程度	1-7	5.04 (1.28)	4.68 (1.30)	5.30 (1.27)
	嘘をついているときに言動が気になった程度	1-7	5.18 (1.13)	4.32 (.69)	5.78 (1.00)
	全体的にうまく嘘をつけた	1-7	4.18 (1.70)	3.86 (1.86)	4.40 (1.65)
	気落ちしている程度	0-4	1.00 (1.03)	.91 (1.2)	1.06 (.95)
	動揺している程度	0-4	2.78 (.82)	2.76 (.92)	2.80 (.80)
	リラックスしている程度	0-4	1.25 (.82)	.96 (.81)	1.45 (.81)

() 内は標準偏差

その他の測定変数

その他に測定した変数はいずれも実験条件による差が見られなかった。各変数の平均値と標準偏差は Table 1 に示した通りであった。

自己意識得点と透明性の推測との相関を算出したが、公的自己意識得点も私的自己意識得点も透明性の推測とは有意な相関を持っていなかった。

考 察

本研究では、制御焦点を操作することによって嘘をついたときの透明性の錯覚の大きさに違いが見られるかどうかを検討した。

促進焦点条件、防衛焦点条件それぞれで行為者の透明性の推測と実際の観察者の透明性とを比較すると、防衛焦点条件では透明性の錯覚が生じているが、促進焦点条件では透明性の錯覚は生じていないことが示された。条件

(焦点操作)と役割の交互作用効果が有意でなかったため留意が必要であるが、防衛焦点に焦点化した方が透明性の錯覚が大きくなる可能性が示唆される結果であり、これは仮説を支持する方向の結果であった。

操作チェックと併せると、促進焦点と防衛焦点では自分の言動に対する注目が異なっていたため、その結果、透明性の錯覚の大きさに違いが生じたと考えられる。嘘をつく場面においては、嘘がばれては困ると意識する防衛焦点において、より嘘がばれると推測する傾向が強まることが考えられる。さらに、観察者が嘘を見抜く程度は制御焦点条件間で違いがなかったことから、この現象は、制御焦点の違いによって、行為者が嘘をつくときに示す、嘘をついていることを示唆する手がかりに違いがあるために生じているのではなく、嘘をつく行為者自身の推論の違いによって生じていると考えられる。言い換えれば、行為者の行為自体は、制御焦点の違いによって変化しないが、その捉え方が異なるということである。

制御焦点の操作によって、行為者の成功動機や失敗回避動機を操作することができたかどうかについては、さらなる検討が必要である。今回、両動機を測定するために用いた項目同士は相関が高く、弁別性の問題があると考えられる。今後、測定の方法を検討し、成功動機や失敗回避動機と透明性の錯覚の関係を検討する必要があるだろう。

本研究では、制御焦点の違いが嘘における透明性の錯覚の大きさに影響することは示せたものの、その効果は十分に大きいとは言えない。制御焦点の効果が十分に大きくならなかった原因として、課題の複雑さが挙げられるだろう。本実験では行為者はジョーカーの代わりに読み上げるカードのマークと数字にある程度の自由度があり、行為者は自分でどのマークと数字を言うか考える必要があった。また参加者の中にトランプのマークや数字を読みあげるのに慣れない者がいた。このように、マークと数字を考えたり、マークを正しく読むことに気をとられ、嘘がばれるかどうかに配慮する余裕のない者もいた可能性が考えられる。本実験の課題よりも単純な課題を用いて実験を行い、制御焦点の違いの効果を検討する必要があるだろう。

また本研究では、教示により制御焦点を操作し、その効果を検討したが、促進焦点に焦点化しやすい人、逆に防衛焦点に焦点化しやすい人といった個人差が存在することも指摘されている (e.g., Higgins, 1998)。個人が持つ焦点化のしやすさの傾向によっても、嘘をつく場面での透明性の錯覚の大きさに違いがみられるかどうか、検討する必要がある。

引用文献

- 遠藤由美 (2007) 自己紹介場面での緊張と透明性錯覚. 実験社会心理学研究, **46**(1), 53-62.
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998) The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**(2), 332-346.
- Higgins, E. T. (1998) Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 30, pp. 1-46). New York: Academic Press.
- Idson, L. C. & Higgins, E. T. (2000) How current feedback and chronic effectiveness influence motivation: Everything to gain versus everything to lose. *European Journal of Social Psychology*, **30**, 583-592.
- 鎌田晶子 (2007) 透明性の錯覚: 日本人における錯覚の生起と係留の効果. 実験社会心理学研究, **46**(1), 78-89.
- Kruger, J., Gordon, C. L., & Kuban, J. (2006) Intensions in teasing: When "just kidding" just isn't good enough. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**(3), 412-425.
- 工藤恵理子 (2007) 親密な関係におけるメタ認知バイアス—友人間の透明性の錯覚における社会的規範仮説の検討—. 実験社会心理学研究, **46**(19), 63-77.
- Savitsky, K. & Gilovich, T. (2003) The illusion of transparency and the alleviation of speech anxiety. *Journal of Experimental Social Psychology*, **39**, 618-625.
- 武田美亜 (2006) 相手との関係が2種類の透明性の錯覚に及ぼす効果: 内的経験を隠す場面を用いた検討. 東京都立大学心理学研究, **16**, 11-19.
- 武田美亜・沼崎 誠 (2006) 共有情報量が透明性の錯覚に及ぼす効果. 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 284-285.
- 武田美亜・沼崎 誠 (2007) 相手との親密さが内的経験の積極的伝達場面における2種類の透明性の錯覚に及ぼす効果. 社会心理学研究, **23**(1), 57-70.
- Vorauer, J. D. & Claude, S. (1998) Perceived versus actual transparency of goals in negotiation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**(4), 371-385.
- Vorauer, J. D. & Ross, M. (1999) Self-awareness and feeling transparent: Failing to suppress one's self. *Journal of Experimental Social Psychology*, **35**, 415-440.
- Vorauer, J. D. & Sakamoto, Y. (2006) I thought we could be friends, but...: Systematic miscommunication and defensive distancing as obstacles to cross-group friendship formation. *Psychological Science*, **17**(4), 326-331.

キーワード

透明性の錯覚、制御焦点